

論文番号	(第 18 回研究会 2019.7.13 於青山学院大学)
タイトル	発話促進と共感を得る聞き手の応答 – 「定式化」発話に注目して–
著者名 (所属)	木野緑 (早稲田大学)
連絡先 E メール	<a href="mailto:midorikino@gmail.com">midorikino@gmail.com</a>
論文内容	
<p>「定式化」発話は英語会話では制度的場面、つまりインタビュアーやカウンセラーの発話行動のひとつとして使われ、インタビュイーや患者の発話を明確化することで必要な情報を入手し、制約がある中で助言や診断に繋げることが目的とされている。特に、カウンセリング場面では患者の問題(トラブル)をいかに効果的に解決するか、つまり適切な診断を下すためのカウンセラーの資質が問われることになるかもしれない。日本語会話でも心理学や認知心理学の分野で研究が進められている。</p> <p>そこで本稿では、カウンセリングなどの心理面接場面ではなく日常の電話会話のデータを使い、話し手の発話を聞き手がトラブルを含むと認知した場合の聞き手の応答としての「定式化」発話に注目し、会話分析の手法を使って分析した。分析の結果、「定式化」発話の特徴として、①推測による言い換え、②話者の「定式化」発話に同調(理解を示す)、③話題の整序(本筋に戻す)、④話者の他の経験場面への話題転換、⑤聞き手自身の経験開示、⑥話し手の発話の誇張が挙げられる。聞き手の「定式化」発話のターン内の構成をみると、直前のターンに対応する要素として肯定的なトークンや驚きを示す反応や直前の発話内の語彙表現の繰り返しが前置きされているか、前置きがない場合は発話のなかに直前の発話の一部が埋め込まれている。聞き手の応答に続く話し手の発話の特徴は、①気づきを示し自己発話の修正、②同調し「定式化」発話を踏まえての展開、③承認し共感表明が挙げられる。</p> <p>01 F .h 3-3 年になるー4 年になるんだわ。(7月で。          02 M えっ?(.)何が↑          03 F 定年になって。          04 (0.2)          05 M .hhh ああくそうなんだあ : : &gt;=          06 Y =うん。          07→M ああ (0.2) でも(0.1)ほら : .hh 相変わらずお二人でテニスしてるの↑          08 F テニスはね : : (.) 週 3 回してるの=          09 M =ちょっとやめてよ。私(.)それーXX 行き始めて .hh 1 回もテニス          10 してないよ。</p> <p>左記は友人同士の会話例である。「定式化」発話(L7)は前の話題「退職」を新しい話題「テニス」に転換し質問形式で産出されている。「テニス」は話し手と夫が前から続けている活動で聞き手も周知の事柄である。次ターン(L8)で話者は詳しい情報(週 3 回)を提示して話題が拡張している。聞き手の「定式化」発話が話し手に夫とのテニスの経験を気づかせ、その後の聞き手の経験開示が、話し手に「いかに幸せな環境にいるか」ということを印象づけている。</p> <p>以上、話し手の発話を聞き手が問題(トラブル)を含むと認知しそれに応答する「定式化」発話に注目して分析した結果、話者らが協働で問題を解決していくやり取りが明らかになった。聞き手の「定式化」発話は話し手に気づきを促しトラブルに対する柔軟な認識を産み出すことで話し手の発話を促進する可能性があること、さらに話し手の発話を自分の経験として受け入れ積極的に協働構築することで話し手の共感を得ることにもつながる側面があることが示唆される。</p>	
参考文献	
Heritage, J and Watson, D. R. (1979) 'Formulations as conversational objects', in G. Psathas (ed.) <i>Everyday language</i> , New York: Irvington Press, pp. 123-162.	
Jefferson, G. (1984a) 'On stepwise transition from talk about a trouble to inappropriately next-positioned matters', in J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) <i>Structures of social action. Studies in conversation analysis</i> , Cambridge: Cambridge University Press, pp. 191-222.	
Kino, M. (2014) 'Topic Organisation in Japanese Conversation.' Doctoral Dissertation Submitted to Graduate School of Sociology, Leicester University.	